

Title	偶成 福澤諭吉の学問論：慶應義塾の知的伝統：退任記念講演
Sub Title	
Author	堀田, 一善(Hotta, Kazuyoshi)
Publisher	慶應義塾大学出版会
Publication year	2006
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.49, No.4 (2006. 10) ,p.1- 16
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	堀田一善教授退任記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20061000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

退 任 記 念 講 演

偶成 福澤諭吉の学問論

— 慶應義塾の知的伝統 —

堀 田 一 善

序 説

1967年4月に慶應義塾大学商学部助手として研究教育活動に従事するようになって以来39年、大学学部時代および大学院修士課程の時代を併せれば45年の永きに亘り慣れ親しんだ三田の山の生活を終え、本年3月末日を以て同大学を定年退職することになった。この間、学部時代に所属した研究会（ゼミナール）の恩師の故鈴木保良教授、同じ研究分野の大先輩である片岡一郎現名誉教授、村田昭治現名誉教授、浅井慶三郎現名誉教授、小西滋人現金沢星稜大学教授等、また、筆者が助手としてお手伝いしていた村田研究会の当時の学生であった鳴口充輝、池尾恭一両氏（共に現慶應義塾大学経営管理研究科教授）を始めとして、数多くのすばらしい師友に恵まれたことはこの上ない幸せであった。

ところで、筆者の主たる研究上の関心は、当初のマーケティング管理論を中心とするものから、次第に、かかる管理論の展開を刺激した社会的経済的状况そのものを合理的に再構成して理解するマーケティング史へ、さらにはマーケティング研究の知的状況を、認識進歩の観点から反省的に取り扱うマーケティング学説史へと移っていったが、この学説史研究へと歩を進めるに際して忘れ難い格別の意義を持っていたのが、故小島三郎元慶應義塾大学教授との出会いであった。

当時、この分野における学説研究といえば、ポール・コンヴァース（Paul D. Converse）やジョージ・シュウォーツ（George Schwartz）等による断片的な研究を別にすれば、オハイオ州立大学のロバート・バーテルス（Robert Bartels）の手になる編年史的な研究がほとんど唯一のものであった。そこでは、時代を追ってこの学科分野の——人々の耳目を惹きつけ時代の「流行」を形作ったという意味で——代表的な蓄積を時系列的に配列し、内容や特徴を解題するという形式が採られており、いかにも過去の蓄積を回顧し、この分野が織りなしてきたタピストリーの模様を示して見せるだけであった。従って、そこには、この学科分野の認識進歩について語るためのメタ・レヴェルの議論が欠落しており、客観的な判断基準のようなものも見出すことができない

かった。

ドイツ経営経済学の学説史研究を専門とされていた小島教授の指導の下で開かれていた研究会では、まさにバーテルス等の議論で欠落していたこの種の問題の取り扱い方をめぐる議論が中心を占めており、当時、新カント派からウィーン学団の論理実証主義へ、そしてその末裔である論理経験主義、さらにはこれら諸立場に対する批判者であり続けたポパー哲学に至る社会科学の方法論および科学哲学が討論の俎上に載せられていた。

この研究会には、他に（五十音順に）榎原正勝（現慶應義塾大学教授）、菊澤研宗（現慶應義塾大学教授）、榊原研互（現慶應義塾大学教授）、丹沢安治（現中央大学教授）、冨塚嘉一（現中央大学教授）、堀越比呂志（現慶應義塾大学教授）、渡部直樹（現慶應義塾大学教授）の諸兄その他があり、それぞれ専門領域の違いを超えて精緻な科学方法論を求めて、真剣な深い議論を闘わせていた。この研究会の末席に連なり続けることは並大抵のことではなかったが、社会的権威に囚われないメンバーの真摯な研究態度や知的廉直さから受けた刺激は何物にも代え難いものであった。これらの人々に共通していたのは、異説に耳を傾け、批判的討論に最高の価値を認める「開かれた精神」であった。学問研究における価値自由の意味を身を以て体現され、ようやく研究者としての一步を踏み出したばかりの筆者を常に暖かな眼差しをもって見守り、時に応じて鋭くかつ実り豊かな批判的討論の場に導いていただいた。

残念ながら小島教授が1984年に急逝され、また何人かのメンバーが他大学に職位を得て、この研究会を当時の形式のまま維持していくことはできなくなったが、しかし、以後もこの研究会は継続されて今日に及んでいる。とりわけ、20年以上の永きに亘り共有する科学論的問題関心の下、共同討論の場を持ち続けてくださった慶應義塾大学の榎原正勝教授、渡部直樹教授、堀越比呂志教授、榊原研互教授、そして新たに加わった若き研究仲間である戸田裕美子助手、早川 貴君（現名古屋商科大学総合経営学部准教授）、高山英司君、慶應義塾大学大学院後期博士課程の岩本明憲君、同じく松尾洋治君等の真摯な研究態度と建設的な批判からは学ぶところ多く、殊の外貴重な経験であった。ここに特記して深甚の感謝の意を表明する次第である。そして今、筆者が研究者としての、そして人生処する上での師として私淑した故小島三郎元慶應義塾大学教授の思い出を抱いて三田の山を下りるに際し、慶應義塾の豊かな知的空間で過ごすことのできた39年の幸せを、改めて噛み締めている次第である。

第1節 パズル・ソルヴァーへの戒め——マーケティング論を中心に——

上で述べたように、筆者は、近年、マーケティング史およびマーケティング学説史を中心に据えて研究してきたが、ここでは、学説史研究の過程を通じて到達した知識論に立って、自らが人

1) 例えば、堀田 一善著『マーケティング思想史——メタ理論の系譜——』中央経済社、2006年；同著『マーケティング思想史の中の広告研究』日本経済新聞社、2003年；同編著『マーケティング研究の方法論』中央経済社、1991年の他、いずれも共著であるが、『オルダースン理論の再検討』同文館、2002年；『マーケティングへの歴史的視角』同文館、2000年；『経済科学と批判的合理主義——ドイツと日本の知的交流——』慶應通信、1988年などを参照されたい。

生の大半を過ごしてきた慶應義塾の知的伝統を筆者なりに確認する意味を含めて、福澤諭吉の学問論の一端を、その教育論も含めて、検討しておくことにしたいと思う。

周知のように、福澤の知的活動が最も活発に展開されたのは19世紀後半のことであった。しかし、そこで公にされてきた彼の学問論・教育論は、道具主義的、実用主義的、あるいは相対主義的態度に塗れ瑣末なパズル解きに埋没することが、あたかも学問に携わる者の務めであるかのような風潮が支配する今日の世にあって、改めて熟読玩味すべき内容に満ち溢れているように思われる。学問研究にどのように向き合うか、そして批判の営みの中にどのような価値を見出すのかという問題を正面から問い質している福澤の見解に接する時、時間を超えて今尚新鮮な響きを汲み取ることができるだけでなく、自らの足元を反省的に見つめ直す手掛かりを看取することさえできるであろう。

そこでまず、筆者の専攻するマーケティング論研究の世界を例にとって、知識に対する人々の向き合い方に認められる今日的な特徴的傾向を概観することから始めたいと思うが、そこに見られる傾向は、今日の多くの知的営みの領域——特に社会諸科学の領域——でもほぼ共通して認められる様相であると言ってもよいであろう。

さて、今日、わが国のマーケティングの研究分野で採用されているアプローチや分析枠組みは極めて多様性に富んでおり、その特徴を一括りにして特徴づけることはほとんど困難である。かかる事態を前にして、中には、アプローチや枠組みの多様性それ自体、当の学科分野の活力を映し出しているものであり、この知識分野の実り豊かな発展のための萌芽を宿していることの表れであって、今後の知的前進を予感させるに十分な可能性を示していると受け止める人々もいる。

しかし他方では、アプローチや枠組みの多様性それ自体は、この学科分野のもつ可能性の指標の一つになり得るかもしれないことは認めるにしても、これが必然的かつ無条件的に、この分野の将来の知的前進に結びつくとは限らないのであって、この事態を手放しで楽観視できるほど事は単純ではない、と受け止める人もいるであろう。

筆者の受け止め方は、どちらかと言えば、むしろ後者に近いと言ってよい。とりわけ、様々なアプローチや枠組みを、ただ単にパズルを解くための「道具としての有用性」という観点からのみ評価する道具主義的な態度が蔓延し、結果的に流行を追い回して、精々よくても「セオリー・ジャングル」、極端な言い方をすれば、実証主義を標榜して「万華鏡型の主観的解釈言明を積み上げる」だけの様相を呈している事態に、ある種の危機感さえ抱いていると言ってよいであろう。ここに見られるような傾向の根本理由は、歴史研究および学説史研究の意義の軽視ないし無関心と無知の拡がりという点に求められる。

筆者もまた、人間の知性史を振り返ってみる時、道具主義的知識の見方が、科学的知識の取り扱い方という面から見れば、本質主義に囚われた言葉の意味の問題をめぐる論争から科学の営みを解放してきたという点で、それに一定の意義を認めるのに吝かではない。しかし同時に、道具主義的な知識の見方には極めて大きな危険が付きまわっていることを直視することも必要である、と付け加えなければならない。

確かに、科学的知識には一種の道具としての側面があることは事実である。しかし科学的知識は単なる道具ではない。それは、われわれを取り巻いている自然のおよび社会的世界の背後に存在すると「推測される」基本的な性質や様態あるいは規則性についての、「客観的な思考内容の世界」——われわれ認識行為者に依存する世界でありながら、それ自体自律的な世界——を構成するのであり、われわれが認識の自由を行使して実在世界について行う言明ないし言明の体系である。そうであれば、原則的に、われわれ限られた人間の理性が編み出した言明の体系によって叙述され説明されるような基本的な性質や様態あるいは規則性が、実在世界の中に本当に認められるのか否か、そしてこの種の言明が普遍性を主張できるのか否か、が直ちに問題とならざるを得ないであろう。かくして、当の言明の体系は、本来的に、批判的討論に付されて吟味されなければならない性質のものであることが判るであろう。つまり、科学的知識の探究の場においては、「言明の真偽問題」の取り扱いが極めて重要な意義を持っているのである。

しかし、知識を単なる道具としてのみ見る限り、知識それ自体の客観的評価の道はほぼ閉ざされることになるであろう。というのも、「道具は真でも偽でもない」からである。この場合、たとえ知識の適用ないし応用（方法論的には、それは、本来、理論にとっての一種のテストの役割を担うはずのものなのであるが）を通じて、当の知識にとって不都合な結果が生じて、それは知識の身分に疑いを挟むべき何か新たな問題の発見には「必ずしも通じない」からである。蓋し、当の問題に対してはその種の知識が適用ないし応用されるべきではなかった、つまり道具の取り違えであったとして、その人の研究者としての力量の問題に置き換えられて、言い換えれば、「批判の矢が知識そのものに向けられるのではなく、それを使った人間に向けられて処理されてしまう」のが常だからである。こうした事態の極端な古典的事例が、火刑に処せられたブルーノであり、異端審問に引き出され所説を撤回することを迫られたガリレイであった。

この道具主義的な知識観が認識論的な相対主義と結びつく時、事態は一層悲観的にならざるを得ない。そこでは、素朴な経験主義（実証主義）を掲げた瑣末な「パズル解き」の巧拙が幅を利かせ、もはや「客観的知識」という観念さえその響きを空しくするであろう。そのような立場は、科学的知識、客観的知識と呼ばれるものが、われわれを取り巻く世界を合理化して理解し、説明することを課題にしているのであり、われわれの理性的な営みによって獲得されたこの認識内容の真理性や妥当性が、当の言明の主張内容を——ただ「否定式の形において」であれ——実在世界と突き合わせることによってテストされることに専ら依存するという観念さえをも、科学的な知識探究の営みの場から排除してしまうことになるであろう。

こうした人々は、自らが主観的に信頼を置く準拠棒に照らして——そして多くの場合、ただ与えられた技法の適用と与えられた解釈規則を当てはめて——ものを語るだけの、「準拠棒の囚われ人」であり続けるだけであろう。彼らにとっての最大の課題は、自らが信頼して依拠する準拠棒と、それを使って導き出された「帰結を正当化する」ことだけである。彼ら（言葉の通俗的な意味での「実証主義者」を含む）は、通常、学説史の持つ意義については無関心ないし無知であるから、異なる準拠棒の間での討論に価値を見出そうとはせず、むしろ可及的にこの種の討論を忌避して党派の内部での「見解の一致」に満足を見出し、あるいは学問的討論の場に政治的力学

関係を導入してその場を凌ぎ、お茶を濁すことに努めるだけである。そこには、自らの発見結果が斯学の支配的理論に対していかなる意味を持つのかを問うという、とりわけ支配的理論との衝突に意義を見出すという、営みも心構えも備わっていない。それらの研究のタイプを万華鏡型と呼ぶ所以である。

確かに、われわれの知的営みから主観性を余すところなく完全に排除することができないことは認めざるを得ないが、しかし、その故をもって、異なれる準拠枠の間での合理的な実りある討論が全く不可能であると考えする必要はない。むしろ、事態は逆である。人間知性の歴史において占めてきた「文明の衝突（異質な見方や考え方の遭遇）の意義」に訴えるまでもなく、異なれる準拠枠の間での合理的討論は、たとえそれが極めて困難なものであっても、原則的には可能であり、この討論——相互主観的テスト——を通じて自らの足元を反省的に見つめ直すことによって、改善されたより良い準拠枠に向けて進むことができ、こうして新たな知的期待の地平が拓けてくるのである。

換言すれば、われわれの認識進歩は、心地よい「意見の一致」や「党派の大きさ」に依存するのではなく、人々の間にもともと存在する「見解の相違」に真摯に向き合い、支配的理論との衝突が持つ意義を問うこと——批判的に向き合うこと——に依存しているのである。それ故、合理的な批判的討論が必要とされるのであり、批判的討論を通じて「誤りを見出し排除する方法を探究する」ことによって、進歩への兆しを感知することができるのである。これが学説史研究を駆動させる拍車となるのであり、同時に、対象理論の研究者に対しては、理論そのものや経験が生み出した「問うに値する新たな問題」を指し示す嚮としての役割を果たすのである。瑣末な実証主義者に共通しているのは、まさにこの点についての無自覚である。

こうした観念を放擲したままでパズル・ソルヴァーであり続けることは、科学の営みと無秩序な知識の寄せ集めを混同しているものと言わざるを得ないであろう。しかし、パズル・ソルヴィングが科学的知識にとって何か意義を持ち得るとすれば、それは、上で述べたように、一種のテスト言明を準備し、時として「新たな問題の胚芽」の役割を担い得ることもあるという、ヒューリスティックな点においてである。

パズル・ソルヴァーにとって必要なことは、客観的な科学的知識が「古い理論のテストを通じて生み出された問題状況」を解決しようとする理性的営みの産物であることを想起することであり、従って、自らが依拠する準拠枠を学説史に照らして客観化し、それに向き合う態度、批判的討論に価値を見出すことのできる開かれた精神の涵養に努めることである。世界は広い、井の中から出でよ、蛸壺の陰に隠れて尊大に振舞うな。そうすることによってこそ、科学の営みの場における問題移動と認識進歩への感触といった事柄に対する強い関心が育まれるのであり、準拠枠を構成する背景知識をめぐる真偽問題に目を凝らし、知識の取り扱い方を支える方法論的な態度決定の重要性に気づかせてくれる手掛かりとなるのである。

第2節 福澤諭吉の学問・教育論

さて、以上は、学説史研究に従事してきた筆者の科学論に照らしてみた場合の、主としてマーケティング研究領域に見られる今日的知的状況の一側面についての所見であるが、そこに見られる様相は、特に現今の経営学や自らの領域を成熟科学と呼んで憚らない経済学等の隣接諸科学を含め、多くの社会諸科学の領域でも認められるところである。しかも、こうした事態は何も現代に特徴的なものである訳ではなく、「正当化主義」が支配的であった遠くの時代から、つまり、本質主義や古典的な合理主義・経験主義が支配した時代から連綿と受け継がれてきたものであって、人々を惑わせている現代の相対主義も、この正当化主義から生まれ出たひ弱な亜種に他ならない。

ところで、儒教的あるいは経典中心主義的思潮が幅を生かしていた、福澤が生きた時代のわが国にあっても、非合理主義的思想の支配は認められたところであった。むしろ「藩閥制度は親の敵でござる」と叫んで憚らなかった福澤の生きた時代の知的状況は、この非合理主義的正当化主義が最も典型的に認められたところであったと言ってよい。そこでは、「アプローチや枠組み(準拠枠)が人々を捉えて離さなかったのであり、フレームワークの神話が支配する『知的に閉じた世界』、真摯な批判的討論を排斥するだけでなく、批判者そのものを抹殺することさえ厭わない、護教主義や世俗の権威主義に塗れた党派が跋扈する世界」が、人々の日常的営みの隅々までを支配していたのであった。福澤が対峙した当時の知識世界は、一般的に言って、そのような性格のものであった。

こうした知的状況を前にして、福澤は人間社会の諸制度について様々な側面から批判的にアプローチし、自らの思想を練り上げていった。彼の思索の射程と広がりには、その点で、誠にもって多方面にわたっていて、その全体像を手取り早く簡潔に描写することは筆者にとっては至難の業である。従って、以下では、彼の思想の限られた部分を鑑として現代科学論と対比させながら、福澤が学問や教育の問題とどのように向き合っていたのかを見ていくことにする。

1. 「洋学」の意義と初期慶應義塾の教育

「今爰に会社を立て義塾を創め、同志諸子相共に講究切磋し、以て洋学に従事するや、事本私にあらず、広く之を世に公にし、士民を問わず苟も志あるものをして来学せしめんと欲するなり。」(『慶應義塾之記』冒頭)。

これは、福澤が義塾を創めるに当たって、教育の機会を何か特別の社会的階層に固有のもののみとするのではなく、知的探究心を共有するすべての人に潜在的に開かれているべきものと考え、志を同じくする人々に支えられた機関ないし制度として慶應義塾が構想されたものであることを

2) 以下において、福澤からの引用文の出典はすべて本文中のカッコ内に示されている。詳しくは、『福澤諭吉著作集』(全12巻 慶應義塾大学出版会)の該当箇所を参照されたい。

闡明にした一文である。

福澤はこれに続けて、享保年間以降、蘭学を中心に発展してきたわが国の洋学が、ペリー来航（嘉永六年（1853年））を機に様相を一変させた事情を次のように描写している：

「……嘉永の季、亜美理駕人我に渡来し、……我邦の形勢終に一変し、世の士君子皆彼国の事情に通ずるの要務たるを知り、因て百般の学科一時に興り、各その学を首唱し、生徒を教育し、此に至りて始めて洋学の名起これり。是豈文学の一大進歩ならずや……。」（『慶應義塾之記』）と。ここで言う「文学」とは、言葉の狭い意味での文学ではなく、広く学問一般あるいは科学的知識の世界という意味であろう。

さてそこで、福澤がかくも高く評価する「洋学」を、彼がどのような性質の学問として受け止めていたかと言えば、それは、「抑も洋学の以て洋学たる所や、天然に胚胎し、物理を格致し、人道を訓誨し、身世を営求するの業にして、真実無妄、細大具備せざるは無く、人として学ばざるべからざるの要務なれば、これを天真の学と謂いて可ならんか」（『慶應義塾之記』）という言説に典型的に表現されている。

つまり、かつて蘭学が主流であった時代には、主として医学書を中心にし、それに付随する形で物理学や天文学、地理、化学が取り扱われていたに過ぎなかったものが、今や洋学の思想が広まるにつれて、自然科学、社会科学（精神科学）および人文科学などの諸分野が相対的に自律的な分野として発展する兆しを見せ始めている。そしてそれら洋学は、経験的基礎を持ち、事象の背後にある（と推測される）理を暴いて理解し、また人間の生き様、社会において身を処する術を指針として教え諭す真正の学、つまり真理探究の道筋に制御された人間理性の産物であると特徴づけている。

換言すれば、自然の世界を支配する性質や様態、規則性を解明しようと欲する物理学に代表される自然科学、人の生き方、徳義や格律を究めようとする人文科学、人間社会における事態の在りようや、その下での人身の処し方を探究する社会諸科学等、いずれもが真理の探究を目指すものであり、言語機能の最高の部類に属する論証機能を駆使して過不足なく努めている点で、漢学・儒学とは比べようもない精緻な説明力・論証力を示す「文明の議論」を形成してきていると高く評価するのである。

しかも、洋学を志す人々が参照する「西洋諸国の学者」は、「日新の説を唱えて、その説随て出れば随て新にして、人の耳目を驚かすもの多し」（『文明論之概略』緒言）という状態である。通説や支配的理論に捉われない大胆な推測と反駁に見られる、この百家争鳴とでも形容できる西洋諸家の説を通底している態度は、概ねすべて「条理の紊れざるものを求めんとする」（『同書』）態度、つまり普遍的な法則や真理を探究することに最高の価値を見出す態度であるとも喝破している。

そこには明らかに、客観的な思考内容の世界の自律性、学問の世界における最高価値として知的自由の擁護およびそれによって可能となる批判の営みの実り豊かさ、そして規制観念としての真理概念に対する福澤の熱い眼差しが観取できるであろう。その意味で、原理や法則と呼ばれる知識それ自体も仮説性を免れ得ないこと、従って、知識の前進は、人々の間での見解の一致にで

はなく、相互の批判的討論に依存するという格率を指導原理としているという考え方かなり近いところまで、福澤の思考が及んでいたと言ってよいであろう。

洋学の特徴をこのように受け止めていた福澤は、慶應義塾命名の翌年（1869年）、中津藩上屋敷長屋を「出張の講堂」として利用するに際して示した文書『慶應義塾新義』の中で、最初の3ヶ月は「西洋のいろは」、 「理学初歩か又は文法書」を読み、次いで6ヶ月を費やして「地理書又は窮理書一冊」、最後に6ヶ月をかけて「歴史一冊」を読むと、いわゆるカリキュラムを定め、さらにそのおよそ7年後、『慶應義塾改革の議案』を練る中で、慶應義塾における学問教育の本旨を明らかにしたのであった：

「一 我慶應義塾教育の本旨は、人の上に立て人を治るの道を学ぶに非ず、又人の下に立て人に治めらるるの道を学ぶに非ず、正に社会の中に居り躬からその身を保全して一個人の職分を勤め以て社会の義務を尽くさんとするものなれば、常にその精神を高尚の地位に安置せざるべからず。」

「一 学問の目的を爰に定め、その術は読書を以て第一歩とす。而してその書は有形学および数学より始む。地学、窮理学、化学、算術等、是なり。次いで史学、経済学、修身学等、諸科の理学〔道理を窮める学問、哲学——引用者挿入〕に至るべし。何らの事故あるもこの順序を誤るべからず。」

最初の引用文においては、学問の機会志のあるすべての人に開かれているべきだと考えていた福澤が、慶應義塾における教育の根本目的を明文化したものであって、後の『修身要領』などの著作に表れることばで言えば、「気品の泉源」、「知徳の模範」となるような「独立自尊」の人物を育成することを謳ったものであった。また、第二の引用文は、いわばカリキュラムに相当する規定というべきもので、今日風に言えば、自然科学、社会科学、人文科学の各分野での理論とそれらが扱う問題を理解し、さらにそれら諸科における知識の取り扱い方を論ずる方法科学へと、知識の地平を切り拓いていくことの必要を謳ったものであった。

この他にも福澤は「東西作文の法」、「語学」、「演説弁論」なども重視していたことは周知の通りであるが、これらも、見方を変えれば、人間が操作する言語が持つ高次の機能、つまり「叙述機能」と「論証機能」の錬磨と、それを駆使した合理的な討論（批判的な討論）が、学問に際して殊の外重要な働きをするものであることを理解していたといえる。

さらに、教育の実際の場合には「半学半教の法」をもって行うことを旨とすることが謳われているが、ここにも、学問の世界には権威など存在しないこと、一切の権威はその光を失うのであって、自らが学びつつ、教えることを通して自らの知見を客観的な批判の場に曝す営みが重要であり、かくして（日新の説を唱え、異説争論の過程を経て）認識進歩への手掛かりとなす必要が意識されていたように思われる。

2. 福澤諭吉の学問観

ここではまず、福澤諭吉の学問論に触れる時即座に眼につく、いくつかの特異な響きを伴う文から始めることにしよう。それらは、明治19年（1886年）の塾生向けの訓話『教育の目的は実業者を作るに在り』に始まり、明治23年（1890年）の大学部開設式における演説の論題『学問に凝る勿れ』、そして明治25年（1892年）11月12日慶應義塾演説筆記『学問も亦唯人生百戯中の一』において述べられているものである。

第1の訓話において福澤は、慶應義塾にあっては創立の当初より「実学」を中心に据えてきた理由を、「……西欧文明の学問を主としてその真理原則を重ずること甚だしく、この点においては一毫の猶予も仮さず」、つまり「客観的な真理の探究」を目的として展開されてきたことに寸分の疑いを挟む余地もない、という点に求めている。しかし他方では、そうした学問のあり方に自ら高い評価を与えているにも拘わらず、「……亦一方より見れば学問教育を軽蔑することも亦甚だし」とも言い放っている。

もちろん、ここでの「実学」は、言うまでもなく、単に「実用の学」あるいは「役に立つ道具としての学問」という通俗的な意味に止まるものではない。また、単に瑣末なデータ主義を謳う素朴実証主義を標榜するものでもない。むしろ、今日的に言えば、人間理性による合理的な推測と経験による規制、つまり推測と反駁のプロセスを経て受け入れられている客観的な知識、合理的な基礎を持つ知識という意味に近いであろう。そして、こうした知識を身に帯びた人々を指して、「実業者」（実業人、つまりビジネスに従事する人とは区別された意味で）と表現したのであろう。

彼は、しかしながら、そのような知識を極めて高く評価しながら、同時に「軽蔑することも亦甚だし」と言う。この点に関して福澤は、「……蓋しそのこれを軽蔑するとは、学理を妄説なりとして侮るに非ず、唯これを手軽に見做して、いかなる俗世界の瑣末事に関しても学理のはいるべからざる処はあるべからずとの旨を主張し、……一切万事、我学問の領分中に包羅して、学事と俗事と連絡を容易にするの意なり」（『教育の目的は実業者を作るに在り』）と解題している。

つまり、「軽蔑する」とは言っても、理論的知識を根拠のない非合理的なもの、妄説と侮っているのではない。むしろ、それは真理を探究しようとする真摯な営みの成果であって、この学問の成果である理論（推測的知識）の光に照らされて世界の出来事や性質が説明され理解されるのであり、また同時に、人々が世事に直面して具体的な手法や手段を選択してその解決を図ろうとする場合でも、意識的にせよ無意識的にせよ、（もしその選択を合理的たらしめようとすれば）その背後にも理論的知識が横たわっているのであるから、極めて高い価値が付与されてしかるべきであると言うのである。

従って、学問を「手軽に見做して……軽蔑する」とは、学問的成果がここまで進歩し前進してきたとはいえ、それはあくまでも人間の限りある能力の産物であるに過ぎないから、どこまで行っても（たとえ現在「法則」と呼ばれているものであっても）、推測的な仮説としての性格を免れ得ないことに留意せよ、独我論に陥るな、世俗的な権威などに信を置くな、批判を受け容れる開かれた精神の体现者たれ、という極めて禁欲的な態度を表現したものとと言えるであろう。

第2の演説において福澤は、「元来老生は学を好むこと甚だしく、畢生の快樂はただ学問に在

るのみなれども、之を好むと同時に学問に対して重きを置かず、唯人生の一芸として視るのみ」と述べ、その意味するところを「……学問に重きを置くべからずとは、之を無益なりと云うに非ず、否な、人生の必要、大切至極の事なれども、これを唯一無二の人事と思ひ他を顧みずして一に凝り固まる勿れとの微意のみ」(『学問に凝る勿れ』)と解説している。

換言すれば、福澤はここでもまた、人間の営みは多面的で、それぞれ価値あるものが多い、そして、それら人間の営みに対して学問的成果が与える影響は極めて大かつ重なるものがあるとはいえ、学問至上主義、科学プラトニズム、そして特定の説へ固執するといった弊に陥ることは進んで避けなければならない、学問的成果といえども、所詮は限りある人間理性の産物に過ぎないことを心のどこかで意識しておくことが必要である、と言うのであろう。あるいはまた、学問的な党派に埋没して始祖の教説を護り抜くことに終始し、異説に耳をふさぐことのないように、異説を前にして(相互に反駁し合うことは構わないが)謙虚であれ、と言うのであろう。

最後の第3の演説筆記の中では「……人間万事を随時の戯れとしながら、本気に之を勉強苦辛するの一事は、……学業を脩め、成業の後、世に出でて家事世事に処するにも欠くべからざる要訣なりと知るべし。学問は人生に必要な。……畢生の力を尽くして本気に勉強すべしと雖も、学問も亦唯人生百戯中の一なれば……学問を軽く看る……(云々)」(『学問も亦唯人生百戯中の一つ』)と指摘し、学問研究も人間のさまざまな営みのうちの一つに過ぎないけれども、人間の生き様にとって学問的知識の与えてくれるところは極めて大きく、人々の生き方や社会の在りように重大な影響を与えることもあるのだから、それを探究し極めようと努めることは大切至極であるが、天下平等の人間社会におけるその他の人間的営みと同様、変移から免れることのできないものであることを認めることを論じている。

さて、これら福澤の言うところを一瞥すれば、3つの論説は共に「……学問は永遠の大計を期して大切なり……」(『学問之独立』)と一方では極めて高く評価しながら、他方では、学問に凝るな、学問に重きを置くな、学問を軽く看よ、という際立った主張を含んでいる。それは、唯に、人生にはいろいろな側面があり、それぞれに意義があるのであって、社会のそこそこに身を処する人々の間に、そしてその身の処し方の間に軽重、貴賤の隔たりなしというだけではない、もっと異なった内容が、福澤の「学問観」ないし「科学観」として横たわっているように思われる。

以下、この点について検討してみることにしよう。

第3節 福澤論吉に見る理論多元論と知識の進歩(方法一元論?)

「……専ら有形の実学を基礎として文学に終わるを旨とす」る学則(『慶應義塾紀事』)の下、演説弁論を通じて「公然所思を演るの法に慣れ、以て他日の用に供せん」(『慶應義塾紀事』)と望む福澤の教育観、学問観は、わが国の文明を推し進めるに、何にもまして(1)これまでの儒者、仏者による「無稽の」知識に抗して、一方においては物理学や化学等の「天然の真理原則を推究したる知識」(『物理学之要用』)を、(2)また一方においては人の処世に際して「皆人生奇異を好

みて明識を失うの」弊に陥らないようにするべく、「事物に就き是非判断の勘弁……の力を附与しその判断の識を明ならしむるの法」(『経世の学亦講究すべし』)を、そして(3)「既に不如意なるを知らばその不如意に処するの法を案ずる」能力を涵養し、「学識を育して判断の明を研く」,「哲学法学の大意又は政治経済の書」に代表される「有用の学」(『経世の学亦講究すべし』)を、つまり「洋学」を以ってする必要を謳ったものであった。

ここでは、当時、彼我の知識の間に見られたその基本的な性格を、洋学にあっては合理主義、仮説主義、論証主義、客観主義にその長所を求め、我邦を永く支配してきた仏教経典や儒学を中心とする知識群の主観主義的で形而上学的性格を克服することの必要を真正面から見据えている。福澤はこうした比較を通じて、わが国と西欧諸国との間に認められた、かくも異なる文明発達の根本理由を明らかにする。

それによれば、日本を含むアジア諸国においては、いわゆる自然諸科学の分野にあっても社会諸科学の分野にあっても、基本的に、客観的な「天然の真理原則を推究したる知識」(『物理学之要用』)に向かおうとすること少なく、専ら観念論の世界に留まり、また諸家の間にたとえ見解の相違があったとしても、合理的で批判的な討論を通じて「……枝末を払てその本源に溯り、止る所の本位を求めざるべからず」であるにも拘らず、「……世間と相移り……互いに相雷同して……通常の世論を唱え……」(『文明論之概略』)で止まない、つまり、世俗的権威や名声に縋って付和雷同し、通説(党派の創始者の教説あるいは時代の支配的パラダイム)に埋没して特定のフレームワークの囚われ人であり続けることに関して一点の疑念も感じない、という態度が一般的に支配的であったと言う。社会の仕組みや構造あるいはその機能様式に関する理解についても同様で、「真成の経世論を知らざる為」(『経世の学亦講究すべし』)、人々は「閉じた社会」の住人であることを余儀なくされてきたと言う。(福澤が演説弁論を通じて議論を応酬する術を身に着けることを重視したのも、「洋学」を特徴づける合理主義、仮説主義、論証主義、客観主義の価値を高く評価していたことと無関係ではないであろう。)

換言すれば、彼我の間には学問のあり方、知識に対する向き合い方に決定的な違いが認められたのであって、知的自由が尊重されるか抑圧されるか、従って、多様な議論の間での切磋琢磨をよしとして価値を認め、合理主義と客観主義に導かれた思考態度の実り豊かさを認め評価して受け入れることができたか否かが、結果的に、両者の間の文明のレベルの違いを生み出してきたと、福澤は喝破したのであった。

福澤は、学問的知識は、短期的には、「……一日一夜の学問に非ず、容易に変易すべからざるなり」、その意味で「学問は沈深にして静なる者なり」(『学問之独立』)といえども、長期的には、西洋諸国の学者に見るように、「条理の紊れざるものを求めんとする」(『文明論之概略』)態度に徹すれば、既述のように、「日新の説を唱えて、その説随て出れば随て新にして、人の耳目を驚かすもの多し」(『文明論之概略』)という状態が常であるはずであると観察している。

そうであれば、当然、「都て事物の議論は人々の意見を述べたるものなれば固より一様なるべからず」(『文明論之概略』)、「……主義を殊にして学派の同じからざることもあらん。甚しきは相互に敵視することもあらんと雖も……政事に関係せざる間は唯学問上の敵対にして、……毫も世

の妨害たらざるのみならず、却て競争の方便たるべし……」(『学問之独立』)と言う。また、「苟も学問とあれば自から主義の見るべき者あるは無論なるが故に、その学問の主義を以て他の学流と競争するも可なり、相互に敵視するも可なり。政治に密着せざる間は、唯その学流自然の力に任じて自から強弱の帰する所あるべき筈……」(『学問之独立』)と言う。

これを今日的に言えば、次のような内容が含意されていると理解できるであろう。つまり、学問は先人の努力の蓄積の上に、そしてそれぞれの論者の想いとは無関係に形成された「自律的客観的な思考内容の世界」として成り立っているものであり、短い時間の間に急激に変化することは少なく、その意味で、一種のパラダイムの性質を示すこともある。しかし反面で、問題関心が同じでも異なる理解や説明の仕方があり得るのであって、むしろそれが常態であろうから、説明的言明(理論)が並存し競合することもあるであろう。多様な理論が互いに覇を競うような事態が見られても、それはそれで構わない。だが、ここで重要なのは、かかる事態を放置したままにしておいたり、非合理的論理外的な圧力で解決を図ろうとするのではなく、いずれの理解や説明の仕方がより理に適っているかを尋ねる合理的な試みが伴うか否かである。その意味で、論理的な思考実験を通して、諸説の間の説明力の優劣が自ずと明らかになっていく筈である、と言うのである。

だが、この福澤の見解には、経験の取り扱い方についての言及が含まれていない。論理的思考実験を通して、確かに、ある種の誤った理論、欠陥のある理論を排除することは可能である。彼は、このプロセスに働く力を「その学流自然の力に任じて」と表現するのみである。ここには、一種の自然調和の思想、あるいは素朴な適者生存説の影響を見て取れるのではないであろうか。あるいはまた、知識に対する約束主義(規約主義)的な見方に通じる響きも認められるであろう。その意味では、諸説の比較あるいは優先選択は、それらの真偽問題を問うことによって可能となるのであるから、論理的なテストに加えて経験による規制(テスト)にも依存するという視点は、いまだ明示的には示唆されてはいなかった。言明の真偽問題の取り扱い、論理的テストと経験的なテスト(方法としての経験)が合わさって十全に機能するのであり、誤り排除のプロセスを経て真理近接の途を辿ることができるのである。

しかし、この点は措くとして、福澤が観察していた当時の学問の世界は、彼の考えるところとは大いに隔絶していた。曰く、「学者先生の中にも随分俗なるものなきに非ず、或は稀には何官何等出仕の榮を以て得々たる者もあらん……。真実に脱俗して榮華の外に逍遙し天下の高処に居て天下の俗を睥睨するがごとき人物は、学者百に十を見ず、千万中に一、二を得るも難きことならん」(『学問之独立』)、また曰く、「……学問にのみ凝り固まりて己が信ずる所に偏し、曾て他の説を入ること能わずして、動もすれば人と争い、遂に極端の非を犯して自ら悟らざるが如き、学を勉めて本気に過ぎたるものなり」(『学問も亦唯人生百戯中の一』)、「議論の始より未来を想像して、……その趣旨のあるところを問わず、只管これを拒むのみ。……遂に敵対の勢いを為して議論の相合うことなし……」(『文明論之概略』)と。

人気評判を求めて見栄を張り、栄達を求めて狂奔し、他人の説に真摯に耳を貸して久しく検討してみようとする余裕もなく自説に固執する、狭量極まれる心根の学者、理論や法則の仮説的性

格に思い至らず、ひたすら批判を嫌悪し忌避する井の中の蛙、こうした物欲しげな、また権威主義に囚われた学者がいかに多いことか、これが福澤の見た学問の世界であった。

福澤は、いわば広義の学説史的視点に立って、こうした事態を克服する途を説くのである。曰く、「古今の世論多端にして互いに相齟齬するものも、その本を尋れば初に所見を異にして、その末に至り強いてその枝末を均うせんと欲するに由て……その各主張する所のものよりも一層高尚なる新説を示して、自から新旧の特質を判断せしむるの一法あるのみ。」(『文明論之概略』)。また曰く、「試に見よ、古来文明の進歩、その初は皆所謂異端妄説に起こらざるものなし。『アダムスミス』が始て経済の論を説きしときは世人皆これを妄説として駁したるに非ずや。『ガリレヲ』が地動の説を唱えしときは異端と称して罰せられたるに非ずや。」(『文明論之概略』)と。

福澤はさらに言葉を継いで、そうであれば「……昔年の異端妄説は今世の通論なり、昨日の奇説は今日の常談なり。然ば則ち今日の異端妄説も亦必ず後年の通論常談なるべし。学者宜しく世論の喧しきを憚らず、異端妄説の譏を恐るることなく、勇を振いて我思う所の説を吐くべし。或は又他人の説を聞きて我持論に適さざることあるも、よくその意の在る所を察して、容るべきものは之を容れ、容るべからざるものは暫くその向かう所に任して、他日双方帰する所を一にするの時を待つべし。即是れ議論の本位を同うするの日なり。必ずしも他人の説を我範囲のうちに籠絡して天下の議論を画一ならしめんと欲する勿れ。」(『文明論之概略』)

ここでの意味は、次のようなものである。つまり、人間の叡智には限界があるという単純な事実を受け容れれば、同じ問題を取り扱っても、相互に対立して競合関係に立ち簡単には決着がつかない説明の仕方もあり得るであろう。それぞれが、何がしかの経験的根拠を持っている場合には、それらの間で決着をつけることは特に困難である。そうした場合、(1) 各々の理論が主張するところのものよりも「一層高尚なる新説を示して、自から新旧の特質を判断せしむる」こと、つまり、より普遍的でより説明力のある高次の理論の探究に向かうことが重要である。(2) 学説の歴史を振り返ってみても、「異説争論年又年を重ね」(『文明論之概略』)、異端妄説とみなされていたものが通説として受け入れられ、この通説が生み出す新たな理論的問題あるいは経験的問題に導かれて、一層新たな理論的推測が展開されて真理(本位)に近づいていくのであるから、「勇を振いて我思う所の説」(新たな仮説)に挑戦することが重要である³⁾。(3) そのためには、それぞれの問題領域(学科領域)における、少なくとも競合理論と最近の知的変遷の様相に精通して初めて、自らの扱う問題が「問うに値するものであるか否か」が明らかになるのであるから、仮初にも蛸壺に潜んで異説を忌避したり、「他人の説を我範囲のうちに籠絡して」天下の議論を画一的にしようとするな、それは知識の世界を死出の旅路に誘うものである。

このように見てくると、福澤の科学観の基礎には、知的自由を尊重し、常識に囚われない推測的知識の工夫案出のすすめ、批判的討論を通じてフレームワークないしパラダイムの神話を打破することの意義が極めて強く位置づけられていたように思われる。

その意味で、福澤は理論多元論を受け入れていたと思われるし、広義の認識進歩史観に価値を

3) ここでの(1)および(2)の主張の中には、大胆な推測と反駁のプロセスを経て知識が累積的に前進するという「知識の累積的進歩史観」に通じる含意を読み取ることができるであろう。

参与していたと言えるであろう。しかし、この認識進歩がどのようにもたらされるのかについては、一方で合理的な批判的討論の意義を認めながらも、他方では、理論間に対立するところがあっても、「容るべきものはこれを容れ、容るべからざるものはしばらくその向かう所に任して、他日双方帰するところを一にするの時（議論の「本位を同うするの日」あるいは「本源に溯り、止る所の本位」——引用者挿入）を待つべし」と言う。今、これを図式的に示せば、

問題 → 公然所思を演ぶる（我思う所の説を吐く）→ 異説争論 → 一層高尚なる新説 → 異説争論 → …… → 止る所の本位

となるであろう。

ここには、アダム・スミスの言う市場価格を中心価格へと誘う「見えざる神の手」に見られる自然調和の思想、本質主義的な観念、あるいは場合によっては、矛盾を矛盾として包み込んだままの止揚（アウフヘーベン）、さらには後のクーン的な、変則事例は暫く脇へどけておいて不連続なパラダイム転換に委ねるという主張にも連なる響きも——時代の思潮を考えれば止むを得ないところであるが——観取されない訳ではない。換言すれば、客観的な科学的知識の場合、真理概念を規制観念として「方法としての経験」に嚮の役割を期待するという観点、つまり、科学の方法は「誤りを発見し排除する方法」（誤り排除の方法）でしかあり得ないとする、方法一元論の立場にまで福澤の思索が既に到達していたと看做すことはできないであろう。因みに、方法一元論（特に批判的合理主義の立場）の場合の認識進歩図式は、次のように示される：

問題₁ → 暫定的理論₁ → 誤り排除 → 問題₂ → 暫定的理論₂ → 誤り排除 → ……

ここでは、科学の営みが、規制観念としての真理概念に導かれた誤り排除を通じて、より普遍性の高い理論の探究を刺激する「問題移動の歴史」の一環として位置づけられている。そこには、自ずと「止る所の本位」といったものはなく、すべては仮説的な暫定的理論の域を超えることができないものとして科学的知識をみなすことが提案されている。というのも、ある言明の体系を経験に訴えて究極的な真理とみなすべき論理的な根拠を、われわれはいかようにしても手にすることができないからである。

第4節 結びに代えて：福澤諭吉に見る方法論的規則

以上、限られた狭い範囲からではあるが、福澤諭吉が学問や教育をどのように見て、どのように向き合おうとしていたのかについて、私見ではあるが、できるだけ合理的に再構成することを試みてきた。そこで最後に、結論に代えて福澤諭吉の学問観・教育観を支えていたであろうと推測される科学論的内容を、学問に、特に経験科学に取り組むに際しての方法論的規則のようなものとしてまとめておきたいと思う：

1. 科学的知識は人間理性の合理的産物であり、真理探究を課題とする法則定立的な営みとして特徴づけられる。(実学思想)
2. 科学的知識は、われわれが、われわれを取り巻く自然的、社会的世界を説明し、理解し、支配しようとして投げ掛ける網のようなものであり、異説争論を術としてその網の目を精緻にしようと努め、以って「心術」を高尚ならしめんと欲するものながら、人々の期待は新たな問題の発見や意図せざる帰結から裏切られることしばしばであり、この事実からは決して免れ得ない。(批判主義、可謬主義)
3. 異説争論(批判的討論)が可能であるためには知的自由が保障されている「知的に開かれた社会」でなければならない。(知的自由、価値自由)
4. 知的自由は最大限に確保されなければならない、「止る所の本位」に至るまでの間は、伝統や一切の権威による拘束(正当化主義)は排除されなければならない。科学は伝統や権威あるいは常識的知識を批判することから始まり、かつそれを永遠の課題とする。(近似的な非正当化主義)
5. 党派・学派を形成し、これに擦り寄り、あるいは学派の創始者の説を擁護することを専らとしたり、単なる流行に迎合して批判を排除・忌避する態度は、知識の世界を死出の旅路に誘うものである。(フレームワークの神話の排除)
6. 問題を前にして、理解と説明の試み(理論)は多元的であって構わない。但し、すべての理論は異説争論(批判の営み)によって制御されなければならない。(理論多元論)
7. 知識の進歩は「勇を振いて我思う所の説を吐く」、つまり大胆な推測と、「異説争論年又年を重ねること、つまり反駁に依存するのであり、異なれるフレームワーク間での困難な討論こそ、知的な実り豊かさの源泉である。(推測と反駁、認識進歩主義)

最後に、福澤の実学との関係で言えば、実学とは思考実験や経験との突合せによって制御された学問的知識に他ならないが、この実学的知識(科学的知識)が重要なのは、それが法則定立的な普遍言明の形式と結びついているからであり、そうであるからこそ、予測や実際の技術的応用の基礎となりうるという点である。

今日、マーケティングの研究分野、とりわけ消費者行動の研究分野では、公理化的な演繹構造を持たない瑣末な孤立した仮説の検証に埋没して事足りりとするパズル・ソルヴィングが「流行」しているが、かかる営みの成果は、たとえ単称的事実の裏づけを持ち得たとしても、それは単に、世界の片隅にそのような事実が見られたという報告に過ぎず、未来は過去に似ているという荒唐無稽な仮定を導入しない限り、予測や実際の技術的応用の基礎にすらなり得ない。ましてや、福澤の言う「通論」あるいは「常談」に対する挑戦者(反証者)の役割を担うことはできない。彼らに必要なことは、「流行」といった心理主義なものを追い回すのではなく、論理主義に立って認識進歩へ寄与する心構え、従って、学説史の視座を身に着けることである。

福澤はこれらの点に気づいていたと思われるし、知識に対する正当化主義的な見方の持つ危険

にも気づいていたように思われる。しかし、彼は、知識の進歩、認識進歩の駆動力が、偏に、意識的・能動的な批判的討論を通じて理論的かつ経験的に新たな問題を発掘することにのみ依存するという論理的な問題、換言すれば、知識の進歩、認識進歩は反駁や反証の営みに全面的に依存するのであって、すべての理論や法則が普遍言明の論理構造的な性質の故に仮説に留まらざるを得ず、経験による「検証」も「確証」も決してできないのであって、ただ反証のみが可能であるという仮説主義、反証主義の手前で止っていたと言わざるを得ないであろう。言い換えれば、福澤の言う「本位」概念には、自然哲学や本質主義的な知識の見方を復活させかねない危険が、尚残存していたと言わざるを得ないであろう。

しかし、この点は、彼の生きた19世紀の知的状況、ならびに彼の背景知識に影響を与えた欧米の諸学者の知見に認められた特徴に照らし合わせて考えれば、止むを得ないと思われる。むしろ、その時代にあって、今日の科学論と太い紐帯で結びつけられる方法論的な認識に近接するところまで既に到達していたという事実の方こそ、高く評価されなければならないであろう。

慶應義塾の知的伝統の枠組みを支えてきたのは、本稿でその一側面を述べてきた福澤諭吉の練り上げた思想であった。その内容は、今日の科学論にも連なるものであり、現代を生きる人々にとっても、尚新しい道標であり続けるものであった。世界に私学多しといえども、その建学の祖の思想がかくも永くかくも多くの人々を惹きつけ、人々の口の端に今尚上ることは、それほど多いことではない。日本の近代化に学問を通じて立ち向かった福澤諭吉の思想は、その稀有な例の一つである。それは、取りも直さず福澤の思想が今を生き続けているからであり、決して故のないことではないであろう。

*本稿は、2006年3月25日に三田山上で行った退任記念講演の内容を加筆・補正したものである。